氏　　名	：	大西　恭子
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第２８１号
学位授与年月日	：	平成２８年９月２７日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	大学生の学業領域における非積極的態度についての現代的検討
論文審査委員	：	（主査）　教授　井上　果子 （副査）　教授　大芦　　治　　教授　佐野　秀樹 教授　一柳　廣孝　　教授　物部　博文

学 位 論 文 要 旨

本論文では，授業を欠席したり，課題に取り組まなかったり手を抜いたり，単位を落として留年を繰り返したりといった学生の学業領域における怠惰や不適応の問題に焦点を当て，これを「大学生の学業領域における非積極的態度」として検討した。

大学性の学業領域における非積極的態度の先行研究のほとんどが 2000 年代以前に行われており，近年の研究はわずかにしか積み重ねられていない。スチューデント・アパシーの研究がさかんに行われた 1980 年代が「大学のレジャーランド化」といわれ，大学性の留年や退学が社会問題化したのに対して，2000 年代以降は「大学の学校化」「学生のまじめ化」が起こり，留年や退学をする学生は減少している。時代の変化とともに，大学性自体の質が変化しているため，現代の時代的背景を考慮した非積極的態度を考察する必要がある。

本論文の独自の視点は，これまでのスチューデント・アパシーや無気力の研究とは異なり，一般の大学生を研究対象としていることである。また学業における非積極的態度の，特に認知的側面に焦点を当てることに意義がある。

本論文の目的は，①一般的な学生の学業領域における非積極的態度の主観的な認知について探索的に検討すること，②大学生の学業領域における非積極的態度を認知的側面から群分けすることであった。

研究 1 では自由記述式の質問紙調査によって非積極的態度の認知的側面を心理的側面と行動的側面の二側面でとらえたデータを収集し分類整理した。その結果，非積極的態度の行動的側面の認知を「やらなければならない学業を，十分やれるのに，手を抜いたり，引き延ばしにしたり，やらなかったりしている行動の認知」と定義した。さらに研究 2 では面接調査から非積極的態度

の心理的側面の認知プロセスをモデル化した。ここで「無気力と空虚感」「選択と回避」「葛藤と後悔」という 3 つの非積極的態度の認知プロセスが得られた。

研究 3，研究 4 では「労力回避」「葛藤」「達成非重視」という 3 因子からなる学業領域固有の非積極的態度尺度を作成し，実際の学業への取り組み，大学生活への不安や悩み，学業への対処方略から尺度の妥当性を検証した。得られた 3 因子は，研究 2 の「無気力と空虚感」「選択と回避」「葛藤と後悔」とやや異なる特徴を示した。

研究 5 では意欲低下とアパシー心理性格によるスチューデント・アパシーとの関連を検討した。研究 6 ではモラトリアムとアイデンティティという青年期発達との関連を検討した。研究 7 では時間的展望，“やりたいこと探し” の動機，本来感，生き方という複数の概念からなる主体性との関連を検討した。研究 8 では日常的な分割投影と，自己愛傾向という人格特性との関連を検討した。学業領域における非積極的態度の認知からの群分けによって，非積極群，回避－葛藤群，中間群，積極群という特徴のことなる 4 群が得られ，それぞれの特徴も検討された。

研究の結果，以下のようなことが明らかになった。

労力回避はより広い範囲の意欲低下を示しやすく，アパシー的な心理に陥りやすく，モラトリアムやアイデンティティの確立の問題と関連しており，時間的展望を持ちにくく，主体性に乏しい。

葛藤は非積極的な態度が行動には現れにくいが，不安や悩みが大きくアパシー的な心理も高いので，心理的に問題を抱えやすい。現実的な職業決定や職業選択に向かいにくいため，モラトリアム状態が続く可能性もあることが示された。

達成非重視はアパシーやモラトリアムやアイデンティティ確立の問題，主体性の有無とは関連せず，的な心理とは関連せず，人生観などの個人の価値観や楽観性や気晴らしと関連していた。

非積極的群はアパシー傾向が高く，モラトリアムの問題を抱えやすい。時間的展望を持ちにくく，自ら動かず受動的に決定する主体性のない群である。現在の生活の中で充実感を感じると，葛藤や達成非重視などの非積極的態度の認知が低下する。

反対に積極群はアパシーとの関連が低く，モラトリアムの問題もない。積極的に自身の将来を模索し，アイデンティティの確立を達成しようとする主体性のある最も適応的な群である。ただし，他者を優先する場合には周りに調子を合わせたり他者に追随したりするため，非積極的態度を認知しやすくなる場合がある。

回避－葛藤群は職業決定を猶予する回避的なモラトリアムの度合いが非積極群と積極群の間に位置しており，非積極群にくらべるとややアイデンティティの確立へと進みつつあって，モラト

リアムが固着した病的な状態にはなりにくい。ただし，将来に向けての目標や希望といった時間的展望はもちにくい。

中間群は，職業選択への取り組みの度合いについては積極群と差がないが，職業決定を延期して遊びを楽しむ新しいモラトリアムの度合いが高いため，主体的積極的に職業選択を模索する健康的なモラトリアムになかなか進展しない。